

## 第4章. 専門家の安全に対する意識

本研究では、安全に対する意識を調査するに当たり、一般の市民とともに専門家の意識にも注目した。メディアからの情報に影響を受けやすいと思われる一般市民に対して、専門家はそれぞれの専門のフィルターを通して情報を咀嚼し、整理していると考えられる。今年度の調査では、社会や都市の安全に、さまざまな側面から関わっている6名の専門家にインタビューを行い、そのような観点からの分析を試みた。

### 4-1. インタビュー調査について

#### 4-1-1. 対象とした専門家

以下に示す都市、防災、犯罪などの専門家に対し、研究会メンバーがインタビューを行った。

- (1) 清水賢二(都市防犯計画・青少年問題) / 日本女子大学教授
- (2) 倉田直道(都市・建築デザイン) / 工学院大学教授
- (3) 小出 治(都市防災・防犯計画) / 東京大学教授
- (4) 西山康雄(都市計画・都市危機管理) / 東京電機大学教授
- (5) 藤野陽三(土木工学) / 東京大学教授
- (6) 山口 英(情報工学・サイバーセキュリティ) / 奈良先端科学技術大学院教授

#### 4-1-2. インタビューの方法

インタビューは直接訪問し、1時間前後の対面による口頭質問を行った。内容は、研究会としての問題意識、および現在行っている研究の概要を伝えたのち、あらかじめ用意した質問を行い自由に答えてもらう形で行った。質問項目は以下のとおりである。

- (1) 日本は安全な国と考えているか。
- (2) 安全と考える主たる要因は何か。
- (3) 近年、安全は脅かされているか。
- (4) そう考える主な理由は何か。
- (5) このまま放置するとどのような状況が予測されるか。
- (6) 安全を取り戻すために、どのような方策が有効と考えるか。
- (7) その他、自由意見。

インタビュー結果は、テープに記録した上で文章化し、当人の確認を受けた上で報告書に掲載している(全文は資料2を参照)。

## 4-2. インタビューの結果

### 4-2-1. 清水賢二（都市防犯計画・青少年問題）／日本女子大学教授

#### （1）市民アンケート調査について（インタビューへの導入部）

このようなアンケート調査は、質問の事件を、知っているものというより、覚えているものという印象だ。人間というものは忘れていくもので、事件も半年たつとほとんど忘れる。

#### （2）日本は安全な国か

相対的には、他の国と比べたとき、日本はまだ安全である。しかし、警察が捕まえる率など、絶対的な量において増加してきている。ただし不安定さがどのように不安定化していくかということと2つある。

一つは、量が質が変わっていくと考えるのが普通で、量が徐々に膨らんでいくと、突然全体がカタストロフィーになっていく。このように、質が量を誘発していくというのが次の異次元で、いまはこの次元に入ってきたのではないかと思う。

もう一つは、問題の解決の困難さである。一つひとつ深刻ではないのだけれど、3つ重なると非常の問題が解けにくくなってしまふ。そういう意味の深刻さがある。この状況が一気におそいかかってきている。

#### （3）日本の安全の優れている点

外国と比べて、まだ地域コミュニティがしっかりしている。「コム」と「ニテ」があって、ともに安全にすみあうための共通の義務となっている。この義務観というのはまだ崩れていない。しかし、急速な勢いでこのところがレベルダウンしてきている。

すなわち高度成長の中で、人間が都市を求めた。都市を作ってそこで自由になった。自由になろうとしているけれど1960年から70年まで、人間的なつながりは農村的なものをもっていた。それがだんだん崩れてきている。

日本で一つ優れているのが警察力。警察がどのくらいで駆けつけてくれるかというレスポンスタイムで見ると、世界一だろう。それは交番というものががっちりしているので、レスポンスが早い。

もう一つあげるとすれば、犯罪をやろうと思っている犯罪企図者がまだ少ない。どういう風に犯罪をやったらよいか学習がすすんでいない。しかし国際化に伴って、日本人は急速に知恵を付けつつある。

#### （4）犯罪の最大の脅威

国際化の進行により、犯罪文化が進行している。また情報化も進行している。警察が犯罪者を捕まえるというのは、実は犯罪者に関する情報をどれくらい集めているかという問題だ。江戸時代から日本では、口頭の情報をしっかり掴まえるシステムをもっていた。ところがいまや、犯罪者の方が警察情報を上手く掴まえる時代がきた。

今までのやり方が時代に合わなくなっている。人間の集団の崩壊が進行している。こういうものの複合として、今の危機を考えている。

この外側に、もう一つある、全体としての警察力を中心として抑止力がなくなっていくている。こういう構造の中で、危機が生み出されている。

#### (5) どうやって対処するか

犯罪における危機が複合的であるため、複合的に対処しなければならない。すなわち、社会設計（まちづくりとかひとづくり）と物的な環境設計、そういうもの2つを統合する総合対策、総合防犯対策をやるのが重要だ。その中身として、コミュニティ作りがある。これは意図しない人づくり。もうひとつ、意図的な人づくりをしましょうということである。

犯罪というものを要素分解すると、加害者、被害者、それを結びつける関係の3つがある。3つの条件をバラバラにすればよいというのが基本。今までの対策は、安全な家作りに集中していたが、犯罪者から見ると、どんな家でもやれる。だから安全な街づくりというのが最大の関門だということがわかってきた。

街づくりをどうやったらよいかというと、例えば犯罪が起こるときの明るさだ。明るさを操作しながら色々やってきた結果、家づくりよりも街づくりをやっていかなければならないと思う。その点で集合住宅がやりやすくて、手をつけやすい。答えは見えている。

#### (6) 「教育が悪い、もっと規律を教育すべき」「厳罰主義、監視社会にすべき」という意見があるが、どう思うか

人間の歴史の中で、まず、自分個人が個人を守る、自分の体ごと守るという時代から始まった。これは絶望的で、弱肉強食という哲学に支えられる。これではあまりにもひどいということで、コミュニティの時代がきている。一緒に守りましょうということで、性善説に譬えられる。するとすぐに性悪説に立つものが出て来る、これは監視社会、監獄型社会。そうなる悪いことした人はいないから、みんな監獄に入ってしまうと社会が成立しない。

そういうことで、20世紀にはいって人間を教育しましょう、教育して弱い者を強化しましょうという話に帰っていくわけ。今もこれが続いているがここにも限界が見えてきた。いかに強化しても、やられるものは、やられる。これが「都市と犯罪」という本の元になる考え方である。

ある研究で、愛知県で調査をやった結果、犯罪を物理的にコントロールできることが分かった。犯罪を管理するという事は、起こしてはいけない犯罪を起こさない、被害にあってはならない人を被害者にさえない、このようなものが起こったとき、完全に被害を回復する。この条件として、犯罪の管理法則を作らなければならない。これに何が必要かということ、情報公開をやらなければならない。もう一つは市民の同意が必要となる。また補助命題として「こういうものをきちんとしたら、こういうものになりますよ」という科学的な視線が必要となる。

教育は大切だと思うが、モラル教育しても犯罪を抑止することは難しい。犯罪者をゼロにすることは不可能である。監視体制を強化することは賛成だが、監視カメラという呼称は適切ではない。例えば「セーフティカメラ」と名を変えたらどうか。

監視体制には人間監視と自然監視の二つがある。人間監視はカメラみたいなものであり、

自然監視は、自然にお互いを見守ることであり、後者が意外に有効であることがわかった。

犯罪者の行動を追いかけると、(1)外側 500m ぐらいから、いい獲物があるかと観察、(2)見咎められないかを確認、(3)逃げやすいか確認、というように心理が変わっていく。したがって行動心理学による分析が可能である。最後になると、逃げやすいか、見咎められないかが凄く良く効く。このところを上手くセットして、安全なまちづくり家づくりをしていけばよい。

泥棒の目にアイカメラを付けて、視線をモニターすると、2階から見ていく。2階には鍵をかけていない。その次に何処を見るかという、どういう家の状態(ガラス窓があって明かりが点いている、人がいるかな)かによって選ぶ。

逃げやすいという観点から見ると、ブロック塀の植え込みが多いほど泥棒に入られやすい。ブロック塀は泥棒にとって通路であり、また、2階への入り口である。自分にとってよいと思っていることが、となりの家の進入口となる。だからまちづくりをやる時に、お互いに話し合っなければならない。

家を作るなら、少なくとも1間は通りに面させる。そうすることで、監視のシステムになる。イギリスをみると、デタッチメントハウスにしても前面を庭に、家が連なっていて、階段が見える。ちょっと窓が外に出ている。あれがいい。

## (7) 国際犯罪について

テロの定義は難しい。サイバーテロみたいなもの、ブラックメールみたいなものもテロである。

テロは、ある意味では復讐だと思ふ。復讐を警察が代わりにやってくれるものが低下しているから、復讐のやり方が個人化している。一方で、国と国の軋轢が強くなっているから、テロが非常に多様化している。

9-11 はテロというよりも、犯罪だと思ふ。それをテロリズムと置き換えたブッシュが馬鹿だと思ふ。イスラム教対キリスト教の世界の宗教戦争になってしまう。宗教戦争の形を取ったテロリズムのなかに永遠に放り込まれてしまう。

(外国人の犯罪という、住んでいる外国人が悪者で、犯罪を起こしている風にテレビは伝えるが、日本に住んでいる外国人はかなり真面目で、そういう人たちも被害にあっている。韓国のスリ集団、中国の蛇頭のような、犯罪者を送り込んで、一週間ぐらい荒稼ぎして帰ってしまう。だから足がつかない(質問者))

フランスでは、親が外国人であったものの犯罪者の発生率は異常に高い。同じことが日本でも少しずつはじまっている。親の世代というものは、何とか日本の中に定住化する。しかし子供は非常に不安定な状態に置かれる。職を求めざるを得ない、帰る国を失っている。

短期流入型も国籍はないけれど、定住しつつある。アンダーグラウンドで生きている。これが育っていった時に問題が起こるだろう。帰ることはできないし帰すこともできない。国籍を与えねばならない。健康の問題と教育の問題がかぶさってくる。

日本の犯罪ってお金しか盗らなかつた。お金以外は売りさばくところがなかつた。しかし、今、マーケットができた、国内の安売りマーケット、それから外国マーケット、いろんなもの

を盗んでスリッと持っていくことができるようになった。

(日本は安全に対して、気を配ってこなかった。それだけ安全だったことではあるが。国際化すると一番危険な国となる。犯罪者を取り締まると警察官が刺されるというように、正当防衛もできない仕組みになっている(質問者))。

警察官の所持するピストルについて法改正があった。威嚇効果さえあればいいということで、銃身を短くした。そうしたら当たりが悪い。警察官がピストル向けたら周りは逃げろといわれている状態である。

#### 4-2-2. 倉田直道(都市・建築デザイン)／工学院大学教授

##### (1) 日本は安全な国か

相対的に日常的な感覚として、かなり安全な国であることは他の国に行ってみてわかる。

日常の環境として生活する上で感じているが、どちらかという社会的な要素が多い。一方、地震国であるとか言う意味では、震災に対する危険性はある。

時系列的に見ると、一般の生活者として、社会的な安全性について都市の犯罪や犯罪者は増えていると思う。新聞紙上でも、また自分の身近なことでも。

##### (2) 環境問題、教育問題など

地球温暖化、大気汚染など地球規模の環境問題に、我々はさうとう真剣に取り組んでいかなければならない。

教育問題については、コミュニティが果たしてきた役割は大きかったが、コミュニティ関係が質的に変わってきている中で、問題は大きい。

情報化の問題については、バーチャルな世界での人のつながりが拡大して、モラルの問題など、我々の予期していない問題が発生してくるのではないか。

##### (3) 犯罪の行方

今が一番ひどい状況ではなくて、さらに状況としては、ひどくなっていくと思う。歯止めのかかる要素というものは無い。

子供の問題、青少年の犯罪というものは今後とも続く。また、日本のコミュニティに入ってこれない外国人居住者、不法滞在の外国人など、犯罪に繋がっていく要素は増えている。

ITとかも人々のコミュニケーションを変えていく。そういう中から犯罪につながる。

##### (4) 都市計画の中で、どういうまちづくりができるか

都市計画にできることは限られている。外国人の問題で言えば、ノーマライゼーションというような社会的なところで、かなり法整備が必要と思う。特に、外国人も日本の社会の中で、ある程度人間としての権利を行使できる、逆に結果としての義務も発生するという形を作っていないといけない。アメリカでもデフェンシング・スペースなどというようなことで、ハードなまちづくりも果たせる役割はある。しかし、市民参加を通じてまちづくり自体が手段として、コミュニティが再生されていく。そういうことが社会の安全を増すきっかけとな

る。コミュニティの問題がまちづくりを通じて再評価されていかなければならない。

#### (5) 公権力による厳しい警備システムが必要か

公権力の力よりも、コミュニティのかなりの内発的な力でそういう安全な環境を作ることが理想である。

公権力も必要なものは残っていくと思う。自衛隊の出動とか歌舞伎町の監視カメラも、ある程度抑止力として働くことは認めるが。

自由が丘の商店街の振興組合がやりだした自警団のようなもの、商店街の人たちの夜回り(PACKS)のような人海戦術の形ならばよい。公権力がやるのとでは大きな違いがある。

#### (6) 犯罪の2極化（プロ化とアマチュア化）

今の警察を見ていると、中途半端な気がする。検挙率が下がっている。いまの社会で起きている様々な犯罪に対して充分対応しきれていない。

警察に対するイメージは、公権力の代表選手みたいなもので、市民に身近かな者ではない日常的に警察は我々の立場でものを考えてくれていないと感じている。

プロ化、組織化、インターナショナル化というものは日本があまり経験してこなかった。犯罪自体がグローバル化すると、アンダーグラウンド部分がふえてくる。犯罪が二極化してくると、プロ化した犯罪でない身近でおきている犯罪などは、警察に頼っていくのが難しい。警察自体に対して不信感がある。まちづくりにおいて、歩行者にやさしい環境づくりをしようと思って、提案してもほとんど門前払いにされる。犯罪に対する姿勢と共通している。

犯罪以外のところでも身近に感じる時というのは、交通取り締まり。その時に犯罪者扱いじゃないにしても、少なくとも関わりを持ちたくない、という存在になっている。

我々の生活の質を、車社会が間違いなく変えた。特にコミュニティ問題とか人間関係などでそれを強く感じる。人が自家用車で日常的に密室化した空間で動いている訳だから、ほとんど人と接する機会がなくなる。

アジア的な道路の使い方というのは、人の移動空間だけではなく、プライベートな空間の延長として、子供が遊んだり、道を介して住む人々のコミュニケーションが成り立っていた。パブリックな歩行者空間としての街路の復権が、人のコミュニケーションを取り戻すきっかけになる。

#### (7) 報道のあり方、マスコミのあり方について

市民の意識レベルでは、犯罪とは伝聞である。だから報道のあり方が問題となる。2次情報を使うのが日常化するというように、ジャーナリズムの質の低下がある。ジャーナリズム自体が多様化しているので、情報を受ける側に判断能力が求められている。

個人のプライバシーの保護について、多分どこかで法整備が必要なのだろうけれど、今のような安易な形での規制は疑問である。

情報の自主規制ができるのは、従来型のマスメディアである。新しいメディアでは、インターネットを通じて、プライベートに近いところで情報発信するから、意図的にいろんなこ

とができる可能性がある。

(今の法律は、メディア発信の方ではなく、取材に対する規制である。だから発信者不在でデマだかわからない話が出て行く(質問者))。ちょっとしたデマが増殖していく仕方というのは半端ではない。

ジャーナリストになる人の姿勢とか哲学というものを、きちっと持った人材を育てないといけない。ワイドショー的なものはそんなものかけらもない。

(日本ほど大新聞で社会面(3面記事)が充実している先進国は余り無い。日本の新聞から、3面記事とテレビ欄と、スポーツ欄を取ったら新聞を買う人はガクと減るのではないか

日本は平和な国だから、バイオレンスのいっぱいあるマンガとかゲームがもてはやされる。みんな平平凡凡としているから、事件だとか事故、ワイドショーでスリルを求める。(質問者))。逆に危機が迫ってくると、面白半分ではワイドショーなどおそろく見たくなくなるだろう。

#### (8) 教育の重要性

教育の問題は大きくて、やはり小さいうちから議論をしなくては。日本人は議論してまとめる、議論して課題を深刻化させるというのが得意でない。大学、家庭の中でもそういう機会が必要である。

そういう機会があれば、まちづくりなんかもそうだ。環境問題など、問題意識はおそらく、子供なりに議論していくことの蓄積だと思う。

自分で考えて、責任もって発言することを子供の頃からやっていたら、報道の仕方とか、変なことに対して自分はおかしいとか、選別できるようになる。これが大人になってから犯罪に行く階かないかのスレスレの部分で自制できるようになっていく。

(人間の危機に対応する能力が落ちている。子供の時に危機を回避して育つ、リスクをどうやったら回避できるかシミュレーションしてないと、もっと大きい危機になった時に対応できない。また危険予知ができていない。予知ができていないと危険に会いやすい(質問者))。

今の子供達は、体力も落ちているし、身体能力も低下しているのだから、危機に対して被害に会う確率が高くなっている。教育も含めて、文明の発達とか教育の変化によって、自分で考えたり判断したりする能力が退化しているのではないか。

少子化の中で、社会意識が失われていく傾向にあるから、社会側も意識的にそういう機会を増やしていかなければならない。学校教育を通じてでも良いけれど、地域のいろいろの活動に子供達が参加する。そういう中で、社会の問題に実感をもつことができるなら、コミュニケーションする力がついてくる。

#### 4-2-3. 小出 治(都市防災・防犯計画) / 東京大学教授

##### (1) 日本は安全な都市か

戦後の中では、犯罪の量と質が相対的に悪くなってきている。量的には増えている。質的には外国人の関係、青少年の関係が増えてきている。それが今の社会不安に反映して、危ないという感じになってきている。もう一方では、警察力が落ちてきている。今まで 80%と

か 90%とか言われてきた検挙率が4分の1くらいに落ちてきているのだから、一般の人は危ないと思っているだろう。

社会的な不安があるとすれば、今がピークである。都市型犯罪というか、既成概念みたいなものが崩れはじめ、セクハラとかストーカーとか、犯罪とモラルみたいな境界線が崩れ始めている。また、家庭内暴力なども出てくるというように、実際はアンダーグラウンドにあったものが全部外に出てきている。

## (2) 犯罪について

凶悪犯そのものは変わっていない。てっとりばやい犯罪が増えている。加害者と被害者の大衆化があって、被害者の人が、一般的な人が増えたということ。犯罪が大衆化して、事故的に犯罪に遭遇することが増えてきた。犯罪が身近なものとなってきた。

犯罪の半分は子供、一方では犯罪のプロ化というように2極化している。青少年の問題に関しては教育の問題とか、家庭の問題でもある。

## (3) 警察力の低下

一つには公務員の定数があって、都市の犯罪が増えるようなところに対して、人員を配置できない。また、現場にいる人の質も下がってきている。

これまでは、社会のための使命感だとか、オヤジが警察官で立派だったからとかいってやってきたものが崩れてきている。仕事はきついし金は少ない、使命感はないときたら、もうやることは無い、という構造になってきている。だから検挙率も下がっていく。

これからはFBIみたいな特殊なチームにして、凶悪犯罪に対して重点配置していく。軽い犯罪は市民で抑えていかなければならない。セクハラとかストーカーに警察を入れていくのは本来の仕事ではない。やる場所はやって、残りは自警団とかNPOであるとか、補完していく仕組みをつくっていかなければ、両方ダメになる。

警察官が減ったから犯罪が増えたと言うような感じはしていない。問題はむしろ、新しいところにすぐに人員を配置できるようなシステムにしていく必要がある。公務員の配置はミニマムスタンダード基準で配置されている。それを警察の場合には、状況が刻々替わってきていて、犯罪が急激に増えてしまうそういうところにシフトできるようにするほうが良い。

## (4) 今の状況を放置すると、もっと危険な国になっていくと思うか。それとも、ある程度、自浄作用が働くか。

軽い犯罪(自転車窃盗)と重い犯罪があるが、重い犯罪が日常化してしまっていると、犯罪を黙認してしまうこととなる。そうするとまずい状況となり、抑えられるかどうかと言う状況となる。

あと、外国人流入に対して日本の入管法がいつまでもつのかということもある。これから安い労働力を持ってきて日本で生産するという選択も当然出てくる。大半の外国人は真面目に暮らしているのに、外国人によるプロ的な犯罪が起こると、これらの人たちが暮らしにくくなっている。そういう人たちは真面目に暮らしているにもかかわらず、学校に行こうとし

ても、オフィスに行こうとしてもいけない。そういう人対にも、選挙権を与えるとか正当な権利を認めて扱わないとボーダレスになってしまう。

#### (5) 報道の異常さ、マスコミのあり方

一緒に危機にたいする対応が非常に悪い。というか知らない。家庭を含めてそうだが、よってたかって、マスコミの餌にされている。報道に名を借りたエンターテインメントとなっている。

学校側にマスコミ対応という概念がなかった。マスコミは正義の味方だという。それが組織や学校にはいってくると、被告人になったような形で進められていく。組織は組織としてマスコミ対応を考えていかなければならない。父兄に対しても学校側が守らなければならない。

マスコミは、結果として視聴率が上がればよい。彼らにとっての倫理規定でやるというが、なかなか線を引けない。活動に規制はできないけれど、取材を拒否するマナーみたいなものはあってもよい。一般の良識で判断していくしかない。

加害者の方は警察がコントロールしてしまうから情報でないことが多い。それで、被害者の方へ行ってしまふ。だから、東京から来た地元と関係のない新聞社は、被害者の顔写真を撮るようなことにもなる。

日本の新聞だけではないか、犯罪についてこんな詳細な報道がされるのは。(3面記事という欄そのものがおかしいのではないか。外国の新聞には社会面なんてない(質問者))。日本の新聞なんて、テレビ番組とスポーツ番組と社会面と、この3つがなくなると売れなくなるのではいか。

日本の新聞では外国のことがわからない。外国のことは全部ロイターとか外国通信社が入って、記事をそのまま載せるだけだからオリジナルは社会部にしかない。

#### (6) 今後どうしたら良いか

都市計画の中で、戦後の経済の効率化とか、プラス快適性のようなことが一番大きな主眼として押しが開発されてきたのは確かなわけで、それが外圧によって止まってしまった。そして都市が持っていた、考えなくてはいけない要素の中で、安全であるとか安心であるとか、昔からのものが逆に出てきたという感じがする。だから、都市の成り立ちというか何のためにあるかということを考え直す一つの機会である。

今までは、都市の安全の仕組みが、個人の、エンドユーザーの責任に全て還元されていて、あるいは特殊な警察というところで分業化されていたものが、もっと都市全体として考える、総合的にみるという機会になってきている。

#### (7) 危機管理と民主主義

自衛隊そのものの災害派遣というものはあるわけで、それを今まで入れてなかった。石原知事になって、警察を強くするとか、警察の行なう事業にお金を出すと、ミクロ的に見るとプラスになっているけれど、マクロ的に見ると警察国家になっていたり、軍事偏重主義

になっていくとか、という恐れはある。

いまのところ、災害と治安がそんなの混乱することは考えられないが、そのときの状況によってはその差がなくなる。自衛隊法をキチンと整理して、災害派遣をもうちょっと定義する手続きをとってくれたら、もっと明確になる。

#### (8) 都市計画の役割

嫌なところ暗いところ不安なところとか、そういうところをどうするかというのがまちづくりの一番原点になっている。その裏には犯罪が絡んでいるわけで、犯罪は非常に入りやすいモチベーションとなっている。防犯環境設計のようなことを考えると、街の環境をよくすることが、犯罪に対してもプラスになるということであれば、お互いによい。

環境の改善によって犯罪を防げるわけではない。しかし、防犯グッズのようなもので、家を完璧にするのは、犯罪に対しては強くなりますが、それよりはむしろ、街全体でもっときちっとしたコミュニティを作っていくことで防犯に貢献したい。

犯罪被害の率は交通事故にくらべたら少ない。犯罪実態というのはないわけで、結局、「不安感」である。そういう意味では不安定であるし、自分の周りしかわからないが、それでも自分の住んでいる所に対して不安や嫌だと思っているところはいくつかあるわけで、それを解決しない限り街は良くなるらない。

#### 4-2-4. 西山康雄(都市計画・都市危機管理)／東京電機大学教授

##### (1) 犯罪、災害と人為的なミス

自治体の首長の意識が重要、その人たちのリーダーシップによって、危機や安全に対する意識をもっているかによって全然違う。

天災を、防ぎようがないという前に、防ぎようがあるという意識を持つ頃が大事だ。例えば、自身探知装置のネットワークが完成すれば、自身が起こっても、その後の対応はだいぶ違う。

##### (2) 日本は安全な国か

テロだとか防犯という意味では、ここ5～6年の間に劇的に日本は変化してきている。

安全神話は崩壊しつつある。特に安全というのは、対応能力との関係でみると、ことが起こることを予知するとか、ことが起こった時にどうするかということで、このような社会そのものの対応能力は落ちている。事態を予想する能力、対応能力が薄れてくると、災害がドンドン起こるし、そうすると、安全というものはドンドン薄れてくる。

ワンルームマンションに住む若者フリーター、中国人や東南アジアの人など、異なる価値観、異なる行動をとる人が、今日、社会の習性だが、かつて単一民族の同じ価値観を持っていてコミュニティを規制していたタガが外れつつある。

##### (3) 安全を脅かす原因は何か

どうにかできるという部分が多いにも関わらず、それに対して意識的に対策を打ったり、